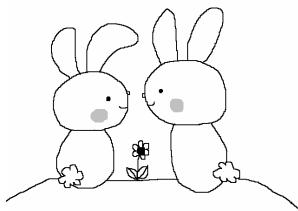


岡山SRH研究会

会報誌

～第4号～



° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * °

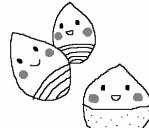
鈴虫の音が美しく聞こえる季節となりました。

皆様も、衣替えをして、秋の深まりを待ちわびている頃でしょうか。

涼しくなってくると、布団の温もりや、部屋の温もりを肌で感じやすくなります。

また、人の心の温かさを感じることも増えている気がして、私はこの季節がとても好きです。

ちょっとしたことで、心がホッと安心し、なんともいえない温かい気持ちになることがあります。



皆様も、何かとお忙しい時期かと思いますので、そんなときこそ、人の心から伝わる温もりとともに、この秋の豊かな実りを楽しみながら、お過ごしくださることをお祈り申し上げます。

(運営委員会 会報誌編集係)

° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * ° .. ° ° ° • * : ... ° * °

今回の会報誌の内容は、以下の通りです。お楽しみください。

・研修会報告

～「第53回 指導者のための避妊と性感染症予防セミナー」の報告です。

・上村茂仁先生のコラム

～今回は、男の子について。色々と考えさせられるような、心に響くお話です

・コラムバトンリレー

～養護教諭の先生から、素敵なお手紙が届きました

・おしらせ

研修会報告

平成18年8月5日(土)「第53回 指導者のための避妊と性感染症予防セミナー」がR S Kメディアコムで開催されました。多くの方々にご出席いただき、誠にありがとうございました。

次回の研修会でも、講義内容等についての情報は得られることと思います。おおまかな内容は、以下の通りです。

講義 「医療現場から診た若者の性と現状と課題」

講師 レディースクリニックひまわり小笠産婦人科 副院長 小笠 貴子

1. 性の現状について(診療・メール相談・学校との関わりから)

2. 課題

性感染症についての啓蒙(確実な防御、早期発見、早期治療、子宮癌検診の受診率向上等)

人工妊娠中絶を受けたものへ、継続的に行うことができる心理支援(術後のケア体制、正確な情報発信の充実)

地域支援活動継続の財源及び人材確保・社会理解(ピアカウンセラー活動、各相談機関間での連携)

大人世代の若年者理解(~大人は一人の人として、性を大切にしているか~)

講義 「学校・地域から診た若者の性の現状と課題」

講師 岡山市保健所 所長 中瀬 克己

1. 性感染症の動向(S T I サーベイランスより)

2. 岡山県における性感染症全数調査の結果

県内医療機関を対象に行った調査で報告された約1000名の患者の結果から、5疾患の罹患率を算出。

若年女性と、より年長な男性が、多く診断されている。

比較的、都市部(岡山市・倉敷市)に多い。

性的に活発な集団への働きかけは別として、女性へは10代から直ちに直面する問題として、男性へはより将来的な課題として捕らえて働きかけるのがよいだろう。

3. 若者の性感染症を疑った際の行動(インターネット調査、グループインタビューによる10代の男女の考え方)

4. 若者の性の対策に携わる方々の問題意識(岡山SRH研究会からの事例報告より)

5. 岡山市保健所におけるHIV・性感染症検査相談事業など

医療、教育、地域の様々な場での対応が関連性を持つ必要がある。

講義 「学校における性教育の進め方・考え方」

講師 新宿区立教育センター教育相談室 相談員 堀内 比佐子

1. 「学校における性教育」を進めるにあたって

・共通理解がはかられていない『性教育』『人格の完成』を目指すことに合致していることが重要。

・学校教育の特性

・中高生の実態から

2. 「学校における性教育の考え方・進め方」(平成11年 文部省)から

3. 中学校学習指導要領に記載されている性に関する内容(現場ではなかなか思うように進められていない)

4. 「性教育」推進のための今後の課題

教師の研修

学習指導要領に沿った指導の充実

教師間での共通理解

保健・医療機関等との連携

家庭の協力、保護者への啓蒙

【おわりに】

「学校における性教育」を理解し、「ねらい」を明確にしたうえで、専門家等への協力の依頼を

家庭、学校と保健・医療機関等を結ぶコーディネーター役が今後は必要

地域保健・医療の活動として、「地域における性教育」の場の設定を

♡ ♡ 上村茂仁先生のコラム【4】 ♡ ♡



今回は、男の子について。

もともと男の子はなかなか大変で、その戦いは胎児の時から始まります。子宮の中では女性ホルモンたっぷりの羊水の中で、自分の精巣が作り出す男性ホルモンのみに頼つて自分の男性を守ります。さて何とか女性ホルモンに負けないで誕生してきたのですが、新生児期の面倒を見てくれるのは、今の日本ではまだまだお母さんが主体です。保育園、幼稚園でも女子の先生が多く、幼児期をほとんど女性とともに過ごすことになります。母親と愛情たっぷりに育ってきた男の子はやがて、学校や友人からいろいろな知識をもらいその関係を大切にし始め、やがて母親から離れようとし始めます。さらに精通やSP（セルフ・プレジャー、マスターベーション）などが絡んでくると、母親とは会話しなくなってしまいます。こんな時期に母親が必要以上に干渉すると、その苛立ちがだんだん男の子の言葉使いを乱暴に変え、怒りとなって現れてきます。もともと男の子は、強く生きなさいとかめそめそ泣き言を言うもんじゃないとか言われて育てられてきますから、唯一男の子として許される感情表現は怒りということになります。悲しいとき、辛いとき、怒っているとき、嫌なとき、男の子はすべて怒りの感情で表現します。そして性のことなどは誰にも相談できずに、ひとりで雑誌やITから知識を得て、体の中で沸き起こる性の大きな波と戦っているのです。父親の役割はこのころから大切になるのですが、仕事仕事の父親はそんな暇がないとそっぽを向くのです。男の子はそんな中で彼女と知り合い、自分のすべての気持ちを彼女にぶつけ、彼女に癒しや愛を求めます。子供時代うまく育ってこれなくて、高校生になっても大人になっても誰かに依存しなければ生きられない男の子は女の子を束縛という形で縛るでしょう。性的な要求が強い子はレイプや暴行などに走るのかも知れません。また、小さいときに母の干渉が強くて、母に逆らうことをあきらめる子供もいます。しかしその感情が押し殺せなくなったとき、子供は怒りを外に（暴力、破壊・・・）内に（自虐、自殺・・・）表現し始めるでしょう。以下に不登校になったある男の子の手記があります。

僕は中1の時不登校をしました。その時も、いじめられた時も、家族にも先生にも言えませんでした。それはいじめが、何処から何処までが遊びで、何処までがいじめなのか僕には分からぬからです。いじめはプロレスごっこや、証拠の残らない無視や物が無くなる事だったからです。先生に頼れないのは分かっています。これまで、7年間でいろいろな先生の対応を見てきました。それにいざとなったら頼れるかもしれないという希望を持って居たかったからです。言って壊れてしまえば誰にも頼れなくなります。家族に言えないのは、親は「先生の言うことを聞きなさい」「学校では先生の指導が正しい」と言っていたからです。また「男なら殴り返して来い」と言わされたからです。普段がこうだから、言ってもどうせ



分かってくれないでしょう。下手をして「お前が悪い」と言わされれば、家にも居場所が無くなります。親や先生に言うと考えただけで、一人で何も解決できない自分が惨めになります。「養ってもらってる、だからこれ以上心配かけたくない」という思いもありました。ですから言えない。不登校になるまで一人で抱え、一人で耐えるしかなかったのです。

男の子の心の叫びに耳を傾けられる大人、いつでも相談に乗って上げられる大人、彼らはそんな存在をいつも待ってるのでしょうか。

♥ コラムバトンリレー ♥

第4走者>>岡山理大附属高等学校

養護教諭 江草 永子

「高校の保健室はどんなところ？」って聞かれたら、答えは「休憩所兼よろず相談所」です。生徒には、「困った時は保健室。」という意識があるので雨が降れば「傘ない？」、ボタンが取れれば「針と糸貸して。」という単純なものから、彼女に振られたら「ちょっと聞いて。(泣かせて)」。親と喧嘩したら「うぜー。」と親の悪口、先生に叱られたら「むかつく。」と教師の批判。友人関係につまずいたら保健室登校。夜遊びを覚えると「学校やめようかなあ。」等、生徒の本音が飛び交っています。

そんな中で、性の相談は少なくなりました。特に「妊娠したかも。」という相談は妊娠判定薬出現以来ぐっと減りました。性のモラルが向上したとは考えられないでの、自分で判定して結果をだしているのでしょうか。でも、絶好の指導の機会が減ったということも言えます。

以前、2年の女子生徒が、授業をさぼって保健室に来ました。「今、何の時間?」「保健。」「保健は週に1時間しかないからさぼっていたら単位をおとすよ。」「いいの。そんなに休んでないから。それに今日はよく知っていることだから。」「へーえ。何をならうん?」「性のこと。」「それは、大事な授業よ。出たほうがいいって。」「だって、もうよく知ってるから。」「じゃ、自分の排卵日はいつ?」「なに、それ、知らん。」・・・実はその前の日に、妊娠を心配して相談にきた生徒に同じ質問をしたら、きょとんとして答えられなかつたということがあったので、それを踏まえての質問でした。よく知っていると思っているのは性交渉のやり方で、自分の体のリズムや性の知識はほとんどないです。実際に困ったことになった時、はじめて聞く耳を持って「もっと早く教えて欲しかった。」と言います。高校生になるまでそういうことを習っていないとは考えられないので、自分には関係のないことと聞き流していたのでしょうか。

保健室では個別指導なのでじっくり聞いたり話したり出来るし、信頼関係も創りやすく、その信頼関係が友人を通じて広がって、性の相談が多かった時期もありました。最近それが減ったのは妊娠判定薬のせいばかりでなく、高校生が性交渉を持つことが特別のことではなくなったと言えるのかも知れません。

もちろん、保健室に出入りする生徒=今時の高校生と、考えてはいけない事はよくわかっていますが。



♥ おしらせ ♥

次回研修会は、11月26日(日)に開かれます。

詳しい内容については、同封の「岡山SRH研究会第11回研修会のご案内」をご覧ください。
皆様お誘い合わせのうえ、ふるってご参加いただきますようお願いいたします。

会報誌第4号の作成にあたり、原稿を提供してくださった方、
また参考になるご意見を与えてくださった方々に、厚く御礼申し上げます。

日ごとに秋涼の加わる頃、
ご健康にはくれぐれもお気をつけください。